



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	Acquisition of English Noun Phrases by Japanese Learners of English Investigated through Sentence Repetition Test( 論文要旨 )
Author(s)	SUNADA, Midori
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/149108">http://hdl.handle.net/2309/149108</a>
Publisher	
Rights	

氏 名 : 砂田 緑  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博乙第90号  
学位授与年月日 : 平成29年3月23日  
学位授与の要件 : 学位規則第4条第2項該当 論文博士  
学位論文名 : **Acquisition of English Noun Phrases by Japanese Learners of English Investigated through Sentence Repetition Test**  
論文審査委員 : (主査) 教授 馬場 哲生  
(副査) 教授 本田 勝久 教授 高橋 邦年  
教授 平出 昌嗣 教授 濱田 豊彦

## 学位論文要旨

英語学習において名詞句の習得は重要な役割を持ち、第一言語習得研究の分野においても、第二言語習得研究の分野においても、多くの研究者の関心の対象となってきた(Izumi, 2003; Smith, 1973)。日本人英語学習者の英語名詞句習得についても多くの研究がなされており、名詞句把握の診断テストの開発なども進められている(金谷, 2015)。しかしながら、テストは筆記によるものが主流であり、Izumi(2003)でも指摘されているように、複数の技能を統合して暗示的文法知識を測る手法によって習得を観察していく必要がある。本研究では、Sentence Repetition Test (=SR)を用いて日本人英語学習者の名詞句の習得を観察した。SRとは、英文を一文単位で聴き、復唱するという手順のテストである。文字の提示がなく、復唱の前にポーズが置かれるなど、英文の処理の負荷が高いことから、学習者の自動化した文法知識、または暗示的文法知識を測ることができる( Erlam, 2006 など)。一文ずつ時間的制約のもとで行われるため、受験者は即時的に文を処理していくことが求められる。その結果、復唱のパフォーマンスには、受験者の暗示的文法知識が反映されると報告されている。

本研究では、Study 1 から Study 4 の4つにおいて、中学校1年生で導入され学習段階の初期から多く使用される構造の名詞句を含む文から、3年生で導入される関係節を含む文まで幅広く調査を行った。

金谷(2015)で指摘されているように、中学校で導入される易しい構造の名詞句についても習得が遅いとされているため、Study 1 では、前置修飾または後置修飾を含む名詞句をテスト文に採用し中学生から大学生までの222名の学習者を対象にSRを実施した。名詞句内の動詞要素の有無も条件に加え、4種類の名詞句について習得過程を観察した。その結果、動詞要素を含まない前置修飾の名詞句が最も易しく、学習の初期段階から習得されることが示唆された。全体の復唱率の高い学習者になるほど後置修飾を含む名詞句の復唱率も上がり、学習段階が進むにつれて後置修飾の名詞句の習得が進んでゆくという、先行研究で示されてきた過程と一致する傾向が見られた(Nonaka, 1989 や Kubota など)。名詞句内の動詞要素については、動詞要素を含む名詞句の方が習得が遅く、含まない名詞句の方が習得が早いということが分かった。

Study 1 で使用した名詞句について、その名詞句が文の主語にある場合と目的語にある場合とで復唱率に違いが見られるかどうかを調査するため、Study 2 を設定した。Study 1 と同様に中学生から大学生まで幅広い英語力の学習者 191 名を対象に SR を実施した。分析の結果、前置修飾と後置修飾、動詞要素の有無に関する難易度の違いについては Study 1 と一貫した結果が得られ、名詞句の文中の位置については、長い名詞句を主語に持つ文の方が目的語に持つ文よりも習得が遅く、Kuno(1974)の Perceptual Difficulty Hypothesis(=PDH)を支持する結果となった。

Study 1 と Study 2 において、名詞句習得の困難点として後置修飾と名詞句内の動詞要素が挙げられた。その 2 つの要素を持つ関係節について、その構造の違いと文中の位置の違いによって習得がどのように異なるのかを調査したものが Study 3 である。Izumi(2003)で取り上げられている SS, SO, SOprep, OS, OO, OOPrep の 6 種類の関係節をテスト文に採用した。高校生 120 名にテストを実施し復唱率を分析したところ、関係節が文の目的語にくる OO, OOPrep の方が、関係節が文の主語にくるものよりも易しく、PDH を支持する結果となった。

しかし、関係詞が主格となる OS については、目的格となる OO よりも難しく、Izumi(2003)や Otagiri(2012)などの先行研究で見られる結果と異なるものであった。また、SS は主語位置に主格の関係節を持つ文であるが、これが OS よりも易しいという結果となった。先行研究と異なる結果となった理由の一つには、SR が音声で行うテストであり、Izumi(2003)で行った 2 文結合や Otagiri(2012)で行った語句の並べ替えなどの筆記試験と異なることが挙げられる。明示的知識が反映されやすい筆記の試験と異なり、SR は時間的制約のもとで音声のみを使用しているため、学習者の暗示的知識、自動化された文法知識を反映するといわれている。SS や OO が易しいという結果の背景には、関係節の先行詞が、関係節内と主節の両方で同じ役割を持つ文が処理の負荷が少ない、習得されやすいのではないかと考えられる。

Study 4 においては、Study 1 から Study 3 の復唱の結果をより詳細に観察し、復唱パターンや復唱中のエラーについて記述した。上位学習者は復唱の際、語や句の取舍選択を即時に行い、文の主要部（主語、動詞、目的語）を落とさず、修飾語句（副詞、形容詞）を落としがちであることがわかった。中位学習者は、文中の重要な語を落としている場合にも、関係節の部分のみ落としているなど、句のまとまりを理解していると思われる復唱例が見られた。下位学習者については、文の最初と最後がもっとも復唱されやすく、記憶に残った語句のみ再現している例が多かった。また、最も復唱率の低かったタイプの文について、文のどの部分が特に復唱されにくかったのかを考察し、困難度を増す要因に迫った。前置修飾かつ動詞要素ありの条件の名詞句については、句の中の副詞と形容詞がもっとも復唱率が低く、句の中の動詞要素が困難であることが窺えた。

Study 1 から Study 4 において、SR を用いて日本人英語学習者の名詞句習得を観察したところ、以下のような傾向が見られた。

- 1)前置修飾かつ動詞要素なしの名詞句は、後置修飾を含む名詞句よりも易しい
- 2)名詞句内に動詞要素を持つものは動詞要素を持たないものよりも難しく、特に前置修飾かつ動詞要素ありの条件の名詞句が難しい
- 3)前置修飾かつ動詞要素ありの条件の名詞句を習得している学習者は、その他の 3 つのタイプの名詞句（前置修飾かつ動詞要素無し、後置修飾かつ動詞要素なし、後置

修飾かつ動詞要素ありの名詞句) についても習得している可能性が高い

4)主語位置に長い名詞句・名詞節がある文の方が目的語位置にある文よりも難しい

5)関係節を主語に持つ文は目的語に持つ文よりも難しい

また、SR は受容と産出の両技能を統合した形式のテストであり、両技能において名詞句が習得されているかを短時間で測ることの出来るテストである。筆記試験のように紙に印刷する必要はなく、音声再生の機材やコンピュータを用いて複数の受験者に同時に行えるため、テスト作成のコストも低く、実施も簡単である。英文を聞いて復唱するという簡潔な手順のテストであるにも関わらず詳細に名詞句・名詞節の習得を観察することができる。本調査では、録音した受験者の復唱を採点者がひとつずつ聞いて評価したため、採点に要する時間は膨大であったが、今後自動採点システムが広く導入されていけば、教室環境でのテストとしても普及していくであろう。今後の SR の活用にも期待していきたい。